

北村暁夫・伊藤 武編著

『近代イタリアの歴史』

——一六世紀から現代まで——

ミネルヴァ書房 二〇一二年・一〇刊
A5 二八〇頁 三二〇〇円

本書はその表題とは裏腹に一六世紀から現代までのイタリア近現代史を過不足なく扱った概説書ではない。本書の大部分はリソルジメント以降の記述に充てられており、統一以前のおよそ三〇〇年間についてはわずかに二章を割くのみである。加えて、いわゆる概説的な記述は各章冒頭に置かれた「時代の概観」で簡単に触れられるに過ぎず、各時代を広く偏りなく解説するという色彩は薄い。むしろ本書の中心を占め、同時に本書の最大の特徴をなしているのは、各執筆者がそれぞれの関心に沿って設定したテーマに関する記述である。特定のテーマから見えてくる各時代の時代像をつなぎ合わせることにより、イタリア史のおおまかな流れを描き出そうと試みているのである。以下その内容を簡単に紹介する。

第一章は一六世紀から一七世紀にかけての領域国家の形成、第二章は一八世紀後半から一九世紀初頭にかけての啓蒙を扱う。第三章はリソルジメント前後の司法統計、第四章は統一後の南部問題がメインテーマとなる。第五章は二〇世紀初頭のジョリッティ時代を反ジョリッティ主義に着目しながら論じ、第六章は第一次

世界大戦からファシズム時代に至るまでをダンスンツイオのフィウーメ占領などに焦点を当てながら追っている。第七章ではファシズム時代を地方ファシズムとその組織化という観点から概観し、第八章は第二次大戦におけるレジスタンスとサロ共和国を、第九章では共和国の成立から高度成長期までを政党政治を中心に論じている。続く第十章は六〇年代末から七〇年代にかけての時代を、学生運動と労働運動から「赤い旅団」へ至る道として描いている。最後の第十一章は八〇年代から現在に至るまでの展開を論じている。

以上のように本書は概説書としては異色の構成をとっており、一六世紀から今日に至るまでのイタリア半島の歴史的推移をおおまかに知りたいと望む初学者には、やや敷居の高い本であると言える。

だが、各執筆者の専門を直接に反映した各テーマを通じて、読者は日本におけるイタリア近現代史研究の研究動向を知ることができる。さらに各章の末尾に付された邦語を中心とした文献目録を合わせて参照することで、日本のイタリア近現代史研究の歩みとその蓄積へと誘われることになるだろう。欧米のイタリア近現代史研究とは一味違った日本のイタリア近現代史研究への入門書という役割を、本書は果たしてくれるのではないだろうか。

(大西克典)